

小麦の大地プロジェクト～3年の軌跡～

根室管内における小麦栽培の可能性を確認

活動背景 ～なぜ、今、小麦栽培???～

小麦は、①草地更新時の植生改善、②敷料となる麦稈の生産、③畑作物の輪作体系改善、④乳製品等の地域資源とのコラボレーション、が期待でき、地域を元気にする可能性を秘めています。

根室管内は気象環境の厳しさから、小麦不適地とされてきましたが、近年の温暖化、品種改良、栽培技術の高度化を受け、H24年度に関係機関による本プロジェクトが設立されました。構成メンバーが一丸となり、中標津町で3年に渡る小麦の試験栽培が始まりました。



小麦試作ほ場(中標津町 H28年)

活動① ～生育・収量調査～

構成メンバーが共同で定期的に生育調査を行い、生育状況を共有するとともに、栽培管理のポイントを確認しました。



共同の生育調査

さらに、収量調査も共同で行い、小麦栽培に対する理解を深めました。



脱穀調整作業

活動② ～栽培マニュアル作成～

栽培結果を検証し、当初は主産地に準じていた栽培マニュアルの改訂を3年間継続しました。

区分	品種	きたほなみ	ゆめちから
起生期追肥 (窒素要素量)	起生期追肥 <math>< 1,000\text{本}/\text{m}^2</math> → N: 4~6kg/10a追肥	起生期追肥 = 0 → 8kg/10a程度追肥 起生期～幼穂形成期の茎数 → 減少穴 → 6kg/10a程度追肥	原則、N: 8~10kg/10a追肥
	起生期追肥 $\geq 1,000\text{本}/\text{m}^2$ → 追肥は行わない		起生期追肥 $\geq 1,500\text{本}/\text{m}^2$ → 状況により検討
幼穂形成期追肥 (窒素要素量)	起生期追肥 = 0 → 8kg/10a程度追肥 起生期～幼穂形成期の茎数 → 減少穴 → 6kg/10a程度追肥	原則、追肥しない	
止業期追肥 (窒素要素量)	葉色値と止業期茎数により判断 ※気象から生育後半に窒素肥効上昇が見込まれる場合は、要検討	4~6kg/10a追肥	
赤かび病防除	開花後に初回防除、5日間隔で計4回 ①シルバキアフロアブル → ②ベフトップジンフロアブル → ③シルバキアフロアブル → ④チルト乳剤25 ・使用薬剤は登録内容により適宜変更		
尿素葉面散布	原則、実施しない ※ただし、止業期に以下に該当する場合は行わない ・葉色値が高い(55以上)場合 ・十分な窒素(N/kg/10a以上)を施肥した場合	原則、実施する → 止業期葉色値53以上の場合は要検討	

活動③～報告会&試食会の開催～

毎年3～4月に構成メンバーが一堂に会するプロジェクト報告会を開催。活動②に係る情報提供を行い、問題や課題を共有して、収量と品質向上を目指しました。

また、本年4月には、中標津産小麦を使用したパン等の試食会を開催し、地場産小麦の魅力を堪能しました。



プロジェクト報告会



試食用のパン

3年間のまとめ ～成果と課題～

H27年産秋まき小麦実績

品種名	きたほなみ	ゆめちから
粗原収量 (俵/10a)	10.5	8.9
製品収量 (俵/10a)	8.7	7.3
検査等級 品質区分	1等Aランク	

活動の結果、春まき小麦は収量品質が低迷しましたが、H27年産秋まき小麦の収量は、製品で全道の平年収量以上となりました。この結果は、当地域における秋まき小麦栽培の可能性を示唆するものです。

課題は、低収要因の排水性改善、労力とコストが負担となっている赤かび病防除の効率化です。これらの改善により、根室管内での秋まき小麦の普及が期待できます。



秋小麦の収穫

